

クレイトポンへの回答

——『クリトン』におけるソクラテスの正義

小島 和男

[キーワード：①『クレイトポン』②『クリトン』③よく生きる④同意⑤正義]

序 『クレイトポン』におけるソクラテス批判

この『クレイトポン』という対話篇は、トラシュロス編のプラトン全集において『国家』の前に置かれてはいるが、十中八九プラトンの作品ではないと言われている。いわゆる偽書である。この作品は、終始、クレイトポンのソクラテスへの批判に終わる。クレイトポンは、「身体や金銭のことよりも魂を大切にしなければならない」や、「人は自分からすすんでは悪を為さない」などのソクラテスの主張に大変感心したことを告げて、その後「ほかのことはもういいから、[その先を¹⁾] どうぞ」と言いたいだけなのだと言語する。ソクラテスは魂の問題である徳に意を用いよと勧めること（いわゆるプロトレプティコス²⁾）はしてくれるが、徳に意を用いるとは実際どうすればいいのかは教えてはくれない、そうクレイトポンはソクラテスを批判するのである³⁾。

偽書とはいえ、このクレイトポンの言うことには一理ある。（正義に

したがってという意味で)正しく生きようと思いたったとしても、具体的にどうしたらいいのか。プラトンの初期対話篇でのソクラテスは、一見なんの答えも出していない。しかし、その答えは議論や言葉にのみ表れるものだろうか。そうした疑問に答えていく上では、ソクラテスが何をしたのかも見ていかなければならないのではないだろうか。確かにソクラテスは初期対話篇においては、主に、倫理的な命題に関する対話をし、相手をアポリアに陥らせてそこで終わっている。しかし、ソクラテス自身の行動、およびその行動に至るまでのソクラテスの決断が述べられている作品もある。『クリトン』である。『クリトン』ではソクラテスが実際に脱獄しないという決断を述べ、脱獄しないままである。ソクラテスが実際に自分がこれから行う行動について、「どうすべきか」を考え、語っているのである⁴⁾。そこから、「徳を勧めるソクラテスは実際どのように決断し、行動しようとしているのか」ということ、クレイトポンが聞きたかったことがみえてくるだろう⁵⁾。

1 『クリトン』における対話

その『クレイトポン』で、ソクラテスにはプロトレプティコスしかしないと非難されているわけだが、はっきりした、明白なプロトレプティコスは『クリトン』にはみられない。

まずは『クリトン』を、48 Eで、大きく二つの部分に分けて考えていきたい。前半部は、クリトンの「大衆の思わく」を気にして脱獄すべしということに関して論駁し、「行動が正しいか否か」を考えるべきであると、つまり「正しさ」のみを勘定に入れて、自らの行う行動を決めなくてはならないと説得する部分(48 Eまでの部分)である。ここで

のポイントは、決してクリトンを一から説得しているのではないということにある。あくまでも、今までの二人の間の同意を確認して、そのうえでそれが変わっているのでなければ、クリトンはそうは考えないだろうという仕方での説得なのである。それらの同意の内容はあとで見えていくが、それらからすれば、クリトンはプロトレプティコスを受けていない人間ではない。ソクラテスの死に直面して、友を助けることが優先してしまって、それらの同意から順序だてて考えることができていないだけで、すでに、一応は徳に意を用いることに同意をしている人物なのだと言える。確かに、それにもかかわらず今までの同意とは矛盾したことを主張しようとするあたり、「いかに生きるべきか」についてクリトンがしている同意が、どこまで実質的であったかどうか、疑わしいところではある。しかし、この対話篇の中では、クリトンはその同意に反駁しないどころか、再び強く肯定している。

そのあとが後半部である。「大衆がどう言うかではなく、正しいことと不正なことについて知っているただ一人の人がどう言うか、すなわち真理そのものが何と言うかを考慮しなければならない(48A)」と言うソクラテスは、「行動が正しいか否か」を考えるべきであると、つまり「正しさ」のみを勘定に入れて、自らの行う行動を決めなくてはならないと言う。そして、その検討に入る前にクリトンに、「行動に当たっては、きみに納得してもらうことを大事にし、きみの意に反したことはしたくないのだ(48E)」と告白し、「考察の出発点(τῆς σκέψεως ἢ ἀρχῆς)」がいっしょかどうかを確認する(48E～49E)。その「考察の出発点」とは、「たとえ仕返しであっても不正は決して為してはならない」というものである⁶⁾。その「考察の出発点」に同意したクリトンにソクラテスは、49Eで、「その続き(τὸ μετὰ τοῦτο)」を話す。それはその「考察の出発

点」から必然的に導かれるもので、「正しいこととして同意した約束は守らなければならない⁷⁾」というものである。「たとえ仕返しであっても」というように無条件で「不正は決して為してはならない」のなら、人とした約束を守るべきなのは当然であろう。それが「正しいこととして同意した」ものならなおさらである。自分が脱獄することはこの「正しいこととして同意した約束は守らなければならない」という命題に抵触してしまうのだということを、ソクラテスは語る。それ故、脱獄はできないのだとクリトンに説得したいわけだが、どうして脱獄が同意の反故につながるのかが、クリトンにはあまり理解できていない。何故なら、ソクラテスの同意した約束の相手であり、その約束を反故にすることで不正を為してしまう対象となるのが「ノモイとポリス」なのだが、それがクリトンにはうまくイメージできていないからである⁸⁾。そこでソクラテスは、「ノモイとポリス」を登場させて、自分の語りの中でソクラテスと対話させることで、それをクリトンに承知させようとしている。

前半部で、問題点を明確にし、後半部でその問題点を考察する。その問題点とは今実際にどうすることが正しいのか、という問題である。いかに生きるべきかの答えは旧知のクリトン相手にすでに出ていたも同然であった。「たとえ仕返しであっても不正は決して為してはならない」、つまりそれをもっと積極的に言い換えれば、正しく生きるべきなのである。それは今まで吟味も重ね、話し合ってきたであろう。とっさの事態にクリトンは忘れていたのかもしれない、それについては確認こそ必要かもしれないが、はじめからの吟味は必要はない。

とすると、やはり、『クリトン』の対話では、どう行動するのが正しいのかを、徳に意を用いるとは実際どうすればいいのかを、ソクラテスがクリトンとともに考えていることになる⁹⁾。

2 よく生きる

では、クリトンを相手にして確認された諸々の同意の内実をテキストから読み取っていきたい。

καὶ τόνδε δὲ αὐτὸ σκοπεῖ εἰ ἔτι μένει ἡμῖν ἢ οὐ, ὅτι οὐ τὸ ζῆν περὶ πλείστου ποιητέον, ἀλλὰ τὸ εὖ ζῆν.

KP. Ἀλλὰ μένει.

ΣΩ. Τὸ δὲ εὖ καὶ καλῶς καὶ δικαίως ὅτι ταῦτόν ἐστιν, μένει ἢ οὐ μένει;

KP. Μένει.

ΣΩ. Οὐκοῦν ἐκ τῶν ὁμολογουμένων τοῦτο σκεπτόν, πότερον δίκαιον ἐμὲ ἐνθένδε πειρᾶσθαι ἐξιέναι μὴ ἀφιέντων Ἀθηναίων ἢ οὐ δίκαιον· καὶ ἐὰν μὲν φαίνηται δίκαιον, πειρώμεθα, εἰ δὲ μή, ἐῷμεν.(Cr.48B4 ~ C2)

「そしてこのことが僕たちにとってまだそのままなのかそうでないのか再び熟考してくれたまえ。つまり、大切にしなければならないのは生きることではなく、よく生きることなのだということがね」

「いや、そのままだよ」

「では、“よく”も“美しく”も“正しく”も同じことだということは、そのままかね、それともそのままではないかね」

「そのままだよ」

「それでは、同意されているものどもの中から、そのことが考察すべきことなの。僕が、アテナイ人たちは許してはいないのに、ここから出て行くことを試みることは正しいことなのか、それとも正しくないことなのか、ということがね」

ここでソクラテスは、「生きること」と「よく生きること」の違いを語っていると言える。「よく」がどういうことかは分かりはしない。しかし、「よく生きる」という言明は、明らかに「生きる」という言明とは違う。そこにソクラテスは「よく」があるとしたのではないか。その「よく」は人間には知り得ないけれども¹⁰⁾、それに向かって、絶えず邁進していかねばならず、そうすることが本当に生きることになるのだという¹¹⁾、その「よく」があると。「よく」という言葉にソクラテスはこだわってはいない。それは「美しく」でも「正しく」でも同じなのだ。そういったプラス方向の言葉全ては、プラス方向なるが故に決してマイナス方向では語られない。だから不正は正ではないために、美しくなく、役に立ちもしないのだ。それはどういうことか。次の引用はその根拠を表している。

ὦ εἰ μὴ ἀκολουθήσομεν, διαφθεροῦμεν ἐκεῖνο καὶ λωβησόμεθα, ὃ τῷ μὲν δίκαιῳ βέλτιον ἐγίγνετο, τῷ δὲ ἀδίκῳ ἀπώλλυτο. ἢ οὐδέν ἐστι τοῦτο;

KP. Οἶμαι ἔγωγε, ὦ Σώκρατες.(Cr.47D3 ~ 6)

「もし僕たちがその人（正義と不正の専門家）に従わなかったとしたら、僕たちはかのを滅ぼし傷つけてしまうだろう。かのもとは、一方で正義によってよりよくなり、他方で不正によって破壊されてしまうものだ。それともそんなものは全くないのかね」

「少なくとも私はあると思うよ、ソクラテス」

しかし、その根拠を示しているのが人間である以上、その根拠さえも仮定に過ぎない。とにかく、プラス方向のものによってプラスされ、マイナス方向のものによってマイナスされるものがあるとしているのだ。

別の言い方をすればこうなる。「大切にしなければならないのは生きることではなく、よく生きることなのだ」という命題を生きていく上でみとめるかどうかである。みとめる場合は正、美、善というものがあるとしていることになる。このようなことをみとめながら生きていく人は極めて少数であることをソクラテスは実感している¹²⁾。だからこそしつつく、後半部の最初でも、ソクラテスはクリトンに確認しているのだ。

ἢ οὐδαμῶς τό γε ἀδικεῖν οὔτε ἀγαθὸν οὔτε καλόν, ὡς πολλάκις ἡμῖν καὶ ἐν τῷ ἔμπροσθεν χρόνῳ ὠμολογήθη; (Cr.49A5 ~ 7)

「それとも、少なくとも不正を行うことは決してよいことでも美しいことでもないというように、以前からも、我々に実に何度も同意されたとおりののか」

3 論理的に考える

しかし、正、美、善というものがあるとし、「よく生きる」ことを目指したとしても、そこに立ちふさがるのは人間であるが故の無知である。

κινδυνεύει μὲν γὰρ ἡμῶν οὐδέτερος οὐδὲν καλὸν ἀγαθὸν εἰδέναι, ἀλλ' οὗτος μὲν οἶεται τι εἰδέναι οὐκ εἰδώς, ἐγὼ δέ, ὡσπερ οὖν οὐκ οἶδα, οὐδὲ οἶομαι (Ap.21D4 ~ 6)

「というのは、おそらく、僕たちのうちの誰一人として、美にして善なるものを知らないのかもしれませんが、しかし、彼は知らないのに何か知っていると思っており、それに比べて私は、実際知らないというまさにそのまま、知らないと思っていますのです」

『ソクラテスの弁明』からひいてきたわけだが、これはいわゆるソクラテスの無知の知の表明である¹³⁾。人間には、善美のことは知ることができない。人間並みの知は、その自らの無知を知ることなのである。では、無知なる人間は、どのように行動すればよいのか。善いことが何かわからなければ、適当に、場当たりに行動してその結果はなるようになる、というのが全てなのだろうか。しかし、ソクラテスは場当たりに行動しているわけではない。『クリトン』で自分が何に従って行動するかを具体的に語っている。

ὡς ἐγὼ οὐ νῦν πρῶτον ἀλλὰ καὶ ἀεὶ τοιοῦτος οἷος τῶν ἐμῶν μηδενὶ ἄλλῳ
πίθεισθαι ἢ τῷ λόγῳ ὃς ἄν μοι λογιζομένῳ βέλτιστος φαίνηται.

(Cr.46B4～6)

「というのは、これは今にはじまったことではなくて、いつもものだが、僕は論理的に思考して最善であると僕に思われるロゴス以外のほかの僕に関することすべてのどんなことにも決して従わないような人間なのだ」

ポイントとなるのは、「論理的に思考し、(λογίζεσθαι)」という点である。では、無知でありながら、論理的に思考し、その結果に従い行動するとはどういうことなのだろうか。「論理的に思考する」というのは、そもそも論理を用いるときに言葉は不可欠であろうから、言葉を用いて考えていくといったことである。ではどう言葉を用いていくのかと言えば、いくつかの考えをそれぞれ言葉で表現して並べて、一つ一つ吟味していき、どれが最善でいままでみとめてきたことと矛盾してないか、一

眞性があるかどうかを調べていくわけである¹⁴⁾。そういった吟味にかかる言葉での表現を、ここでは仮説と呼ぶことにしたい。

正、美、善があるとし、それこそが生きていく上で求めていくべきものであるとし、そのような生を選んだからには、仮説を立てそれを確かめ続けていかなければならないのである。もちろんその仮説とはいかに行動すれば、正、善、美にかなうかということについてのものである。

人間にはそれら、正、善、美は知りえない¹⁵⁾。けれども実際のプラトンの作品にあらわれているソクラテスの行動を見てみると、そこに諦めの様子はない。知りえないからこそ¹⁶⁾、知を追求、欲求し続ける愛知の道を邁進していると言えるのである。それこそ、よく生きるべきであるという見解を持つ人の行動なのである¹⁷⁾。

人間は無知であるが、予想はできる。仮説を立てられる。その仮説を仮説とは思わずに、真実だと思ってしまうと、それは人間の分を超えたことになってしまう。だからソクラテスは、エウテュプロンに「神々に愛でられることが敬虔である」と主張されても、頭ごなしに違うとは言わず、対話をして確かめるという過程を経るのだ。この対話が先の論理的な思考と重なるのである。

つまり、人間は、仮説を立て、それを確かめ続けていかなければならないのである。だが、それに終わりはない。人間が知者である神になれるとしたらそこが終わりかもしれないが、そんなことは到底ありえない。

とはいえ、立てた仮説をいつまでも吟味し続けられるわけではない。人間は生きていく中でつねに行動の選択を迫られている。その一瞬一瞬が行動の選択のタイムリミットなのである。ここに飛躍がある。確かめ終わった仮説はないのに、どうしたらよいかのかが確実に分かっていないのに、そこを飛び越えて行動しなければならないのである。絶対的に

よいことは人間には決してできない。それには仮説を確かめ続ける無限の時間を要するからである。だからこそソクラテスは、「論理的に思考して最善であると僕に思われる」というように言うのだ。あくまでもそのとき「僕に思われる」ものなのであって、それは本当に最終的な結論ではないし、絶対的なものではないのだ。それなのに生きていかねばならぬ、飛躍して行動しなければならぬのである。そこに、人間並みの正義¹⁸⁾とでも言えるものがあらわれてくる。

4 人間並みの正義

人間並みの正義とは、人間にできる限りの正義である。よく生きなければならないのに、何がよいのかはわからない。けれども時間は過ぎていく。結局人間は何もわからないまま何か行動してしまっていることになる。行動しないことはできないのだ。では、その現状に対してどうすればよく生きていることになるのか。それには、仮説を立て、それを吟味し、決して不正を為さないようにと、その吟味の過程でのとりあえずの仮説に従うしかないのだ。とりあえずの仮説とは、「論理的に思考して最善であると僕に思われるロゴス」なのである。それに従っていくことを私は人間並みの正義と呼びたい。その吟味とは「論理的に思考」することであり、言葉を用いて考えていくことであり、また対話である。

対話による同意、それに基づく行動というこの話で、前提とされてしまっているのが他者の存在である。というのは実践的な行動についてソクラテスは語っているからである。社会的動物である人間にとって、その実践的な行動は、常に他者に関係しているのである。

その上、他者は自分と同じく無知なのかもしれないが、自分が考えつ

いた仮説よりもよいように思われる仮説を提示しないという保証はない。

そういった他者との同意が、無知なる人間が正しく行動しようというとき、必要になるということは明白である。対話の中でのその同意が、とりあえずの仮説として出てくる。

πότερον ἂν ἄν τις ὁμολογήσῃ τῶ δίκαια ὄντα ποιητέον ἢ ἐξαπατητέον;

KP. Ποιητέον. (Cr.49E6 ~ 7)

「…ある人が誰かに正しいこととして同意をしたことは、すべきか、それとも欺いてしないでもよいだろうか」

「すべきだよ」

正しいこととして（もちろん絶対的に正しいとは言えないものだが）同意をしたことを別のロゴスもなしに欺いてしまっただけとはいけないということがここではいわれている。これは先の「論理的に思考する」ことにつながる。同意の内容は吟味されるわけだが、そこで大事なのが、矛盾してないこと、一貫性があることなのである。仮説を立て、確かめていくというのは、瞬間の活動ではない。ともすれば永遠の時間を要するほどに持続的な活動なのである。その活動が、一貫性なしに成立しえず、その一貫性を保つためには、すべき（ποιητέον）なのである。みとめ続けるだけでは不十分なのだ。行動しなければならない。行動するためには先の飛躍をしなければならない。本当にそれが正義かは神でなければわからない。しかし、同意をしてしまった以上は分からないながらも、行動しなければならないのだ。そうでなくてはそれを正しいこととして同意したことになるからである。完全な言行の一致が要求されているわけである。言行を一致させ行動するが、その行動がよいかどうか、

正しいかどうか、確実なところは人間にはわからない。そういった意味では、正しく生きようとする人間の行動は、生は、いわば賭けだと言える。

一貫性をもってして、自分の行動、生き方について、何が正義にかなっているのか、対話を通じて吟味し続けていく。その対話は自分の行動が関係しているところの他者との対話である。そこである程度吟味に耐えぬいたその時々¹⁹⁾の最善のロゴスを正しいこととして同意する。この同意に従うことが人間並みの正義だと私は考える。

5 ノモイとポリス

換言すれば、人間並みの正義は同意なしには成立しないということである。それでは、ソクラテスが『クリトン』において正義にしたがって脱獄しないのは、どんな他者とのどんな同意によるのか。ここに、クリトンにはイメージできなかつた「ノモイとポリス」があらわれてくる。

ソクラテスにとって、「ノモイとポリス」とは一体何だったのか。一生のほとんどをアテナイで過ごしたソクラテスにとってそれがアテナイのであることは疑いようはない。とすると、ソクラテスにとって「ノモイとポリス」とは、祖国アテナイとは、その政治的成員である自由人の成人男子の総体が抽象化されたものであり、『クリトン』において登場した「ノモイとポリス」はそれを擬人化したものなのだ、と言ってしまつてよいだろうか。つまり、「ノモイとポリス」を、『ソクラテスの弁明』の相手であったあの「アテナイ人たち」と同一視してしまつてよいのかということである¹⁹⁾。しかし、そうは簡単にはいかない。その「ノモイとポリス」が、まず、次のように語っているからである。

μητρός τε καὶ πατρός καὶ τῶν ἄλλων προγόνων ἀπάντων τιμώτερόν ἐστι πατρὶς καὶ σεμνότερον καὶ ἀγιώτερον καὶ ἐν μείζονι μοίρα καὶ παρὰ θεοῖς καὶ παρ' ἀνθρώποις τοῖς νοῦν ἔχουσι, (Cr.51A8 ~ B2)

「母よりも父よりもその他すべての先祖たちよりも、祖国は尊く、畏敬すべきものであり、神聖であり、より尊重されるものなのであり、そのことは神々のそばでも理性を持つ人々のそばでもそうなのだ」

「祖国 (πατρίς)」とは、発言者である「ノモイとポリス」、彼ら自身のことを指している。とすると、「ノモイとポリス」とは、母、父、先祖よりも大事なものということになり、そういった特定の人々を指していることにはならない。従って、そういった特定の人々の集合体である「アテナイ人たち」と同一視はできない²⁰⁾。

次に、このようにも語っている。

καὶ ἐκεῖ οἱ ἡμέτεροι ἀδελφοὶ οἱ ἐν Ἄιδου νόμοι οὐκ εὐμενῶς σε ὑποδέξονται. (Cr.54C6 ~ 8)

「また、あの世では私たちの兄弟であるあの世のノモイが君を親切には迎えないだろう」

この発言を踏まえて明らかになるのは、「ノモイとポリス」は「あの世のノモイ」の血筋のアテナイであるということである。そのアテナイは現実の墮落したアテナイなのではない。その先にソクラテスが見ていたアテナイなのだろう。

しかし、そのようなアテナイ、「ノモイとポリス」との間に、同意を生じさせることができたのだろうか。「ノモイとポリス」はその語りの

中で、繰り返し「同意」という言葉を使い、ソクラテスとの間に同意があったことを主張する。挙げると以下の四つである。

- ・ポリスの下した裁定を守るという同意 (50C5 ~ 7)
- ・私たちが命ずることはなんでもするという同意 (51E4 ~ 5)
- ・私たちと約束した事柄に従ってポリスでの生活をおくるという約束と同意 (52D2 ~ 3)
- ・私たちに従ってポリスでの生活をおくるという同意 (52D5~4)

テキストに従って四つ並べたが、その内容はほぼ重なる。ソクラテスは、「ノモイとポリス」に従ってそこで生きていくということに同意していたわけである。

もちろん、その同意の仕方は、二人の人間がいて、「そうだね、そうしよう」とうなずきあうような同意とは違う。その同意の仕方は、「言葉ではなく行動で以って (52D6)」なのだと言われている。ソクラテスはその同意がいやなら他のポリスへ出て行くことができたにもかかわらず出て行かず、七十年間、旅行すらほとんどしないでアテナイで暮らしてきたのだが²¹⁾、そのことから「ノモイとポリス」はソクラテスが、「ノモイとポリス」に従ってそこで生きていくということに同意していたのだと語るのである。

先に述べたように、ソクラテスは正しく生きようとしており、それ故、一貫性を保ち、言行を一致させているわけである。なので、ここで「ノモイとポリス」に、「行動ではそうしていましたが、本当は嫌だったのです」ということを言うわけにはいかない。嫌だったのならば出て行くことはできたのだし、事実としてソクラテスはそういうふうに行動しな

かった、つまりは出て行かなかったのだから。そういったわけで、「ノモイとポリス」が語る通りに、語る通りの仕方、ソクラテスは「ノモイとポリス」と同意ができていたということになるのである。

次に、その同意を反故にすることが、一体どういう次元で「ノモイとポリス」に不正を為すことになるのか、「ノモイとポリス」に害を加えることになるのか、を考えていきたい。

『クリトン』のなかでは、ノモイがポリスと共にあらわれて、ノモイが語っているわけだが、テキストの中でその二つが切り離されて考えられているところはなく、ノモイが語る時もすべて自分を二人称に含めて語っている。ノモイ抜き、ポリスもポリス抜き、ノモイもあるはずはないのだ。だが、語るのがノモイであるという点を見殺ししたくない。あくまでも重きはノモイにある。そのノモイとは法である²²⁾。『クリトン』のなかに、その法の中でも「最も大切な法」のことが語られている箇所がある。

ἐτόλμησας οὕτω γλίσχρως ἐπιθυμῆν ζῆν, νόμους τοὺς μεγίστους παραβάς,
(Cr.53E1 ~ 2)

「最も大切な法を踏みにじってまで、そのように、さもしく、生きることに敢えて君は執着したのだ」

ここの、「最も大切な法 (νόμους τοὺς μεγίστους)」である。それはどんな法だろうか。その答えはテキスト上で少し前にある。

πολλὰ γὰρ ἂν τις ἔχοι, ἄλλως τε καὶ ῥήτωρ, εἰπεῖν ὑπὲρ τούτου τοῦ νόμου ἀπολλυμένου ὅς τὰς δίκας τὰς δικασθείσας προστάττει κυρίας εἶναι.

(Cr.50B6 ~ C1)

「というのは、ある人は、とりわけ弁論家は、破壊されつつある、決定してしまった判決は有効でなくてはならないとする法のためにたくさん言うことができるだろうからね」

つまり、その「最も大切な法」の一つが、「判決は有効でなくてはならないとする法」なのである。

法というものは一種の同意からできている。この成立の場にあるものこそ、先の間人並みの正義が生じてくるところの、同意を欺かないという一貫性である。それをもとに発生したさまざまな同意、それがここの法、ノモイなのである。逆から言えば、そのノモイが発生し成立するために必要なのが、この「判決は有効でなくてはならないとする法」、換言すると「同意を守らなければならないという同意」なのだ。この同意があってこそノモイが生まれ、秩序が生まれる。その秩序を体現しているのがポリス（国家）であるのだから、この同意を破ることになってしまうと、「ノモイとポリス」に不正を働くことになる、「ノモイとポリス」に害を加えることになるということは明らかである。

そのポリス（国家）のなかで人はみな生まれ育つ。生まれたときからポリスという共同体において、ノモイという同意のある他者との関係の中で育てているのである。自分とか自己とか言ったとき、ほかの何からとも切り離れて、まったく独立した自分、自己のようなものは少なくともソクラテスには考えられなかった。故にソクラテスは、「君自身や友人たちや祖国と私たち(ノモイとポリス)に対して害を加え(54C4 ~ 6)」というように「ノモイとポリス」に語らせるのである。先にも述べたように、もっとも害を加えてはならないものとして「ノモイとポリス」が

あげられるわけだが、ここではさらに、「君自身」と「友人たち」が新たに加えられて語られている。ということは、ソクラテスは「ノモイとポリス」を滅ぼすことが自分自身と友人たちを滅ぼすことにつながると考えていたわけである²³⁾。ソクラテスの言う自分自身、自己とは、それだけで完結しているものではないのだ。他者とともに暮らしている「ノモイとポリス」との関係があつての初めての自己なのであり、それ抜きの自己などないのである。ソクラテスにとって、生きている主体である自己は、すでに他者含みのものであり、ポリス含みのものであり、故にこの『クリトン』でソクラテスが「ノモイとポリス」の口を借りて語ることには、当然、矛盾も無理もない。

6 脱獄をしないわけ

そうした「ノモイとポリス」との同意に基づく正義が、端的に語られている箇所がテキストの中にある。そこではまた、「ノモイとポリス」との同意についてさらに詳しく語られている。

καὶ σέβεσθαι δεῖ καὶ μᾶλλον ὑπέικειν καὶ θωπεύειν πατρίδα χαλεπαίνουσαν ἢ πατέρα, καὶ ἢ πείθειν ἢ ποιεῖν ἅ ἂν κελεύῃ, καὶ πάσχειν ἐάν τι προστάτῃ παθεῖν ἡσυχίαν ἄγοντα, ἐάντε τύπτεσθαι ἐάντε δεῖσθαι, ἐάντε εἰς πόλεμον ἄγῃ τρωθησόμενον ἢ ἀποθανούμενον, ποιητέον ταῦτα, καὶ τὸ δίκαιον οὕτως ἔχει, (Cr.51B2 ~ 51B8)

「又、父よりもむしろ祖国に、荒れ狂っているときには屈し、へつらわねばならないのだ。そして、あるいは説得するか、命ずるところのものどもをせねばならぬし、何かを受けることを命じられたら、黙っ

て受けねばならない。殴られることであれ、縛られることであれ、戦争の中へ連れていかれ、傷つけられ、殺されたりするかもしれないも、それらのことどもをせねばならぬのだ。そして正義とはそういうことなのだ」

問題は、καὶ τὸ δίκαιον οὕτως ἔχει である。「そして正義とはそういうことなのだ」と訳したがもっと直訳すると、「そして正義はそのような状態である」となる。もちろんここで言われている正義は先の間人並みの正義だと私は考えるわけだが、テキストに即して読んでいくと「そのような状態」とは前のセンテンスの内容ということになる。と、ここで重要なのは、ἢ πείθειν ἢ ποιεῖν ἃ ἂν κελεύη 「あるいは（祖国を）説得するか、（祖国の）命ずるところのものどもをするか」というところであろう。正義とは、「相手を説得してできなければ相手のいうとおりにすること」なのだ。説得とは、対話をして相手の同意を得ることである。その説得ができないということは相手のロゴスよりもよいロゴスを提示できなかったということであり相手に従うしかないのだ。

この場合、つまりソクラテスの場合は特に、従わずに説得を続けるということはできなかった。もちろんここでは、『ソクラテスの弁明』の行われたアテナイの法廷がイメージされるわけだが、それにはやはり判決という名のタイムリミットがあったのである。

ὅς δ' ἂν ὑμῶν παραμείνη, ὁρῶν ὃν τρόπον ἡμεῖς τάς τε δίκας δικάζομεν καὶ τᾶλλα τὴν πόλιν διοικοῦμεν, ἥδη φαμέν τοῦτον ὡμολογηκέναι ἔργω ἡμῖν ἃ ἂν ἡμεῖς κελεύομεν ποιήσῃ ταῦτα, (Cr.51E2 ~ 5)

「そして君たちの中のある人が、私たちがどのようにして裁判に判

決を下し、その他の点でも、ポリスを支配するのか、を見つつ留まるならその人は行為によって私たちが命ずることは何でもするということを私たちとすでに同意してしまったのだと私たちは主張するよ」

つまり、そのような説得の時間に制限のあるやり方にソクラテスはそれを正しいこととしてすでに同意してしまっていたわけである。

7 「よく生きる」と死ぬこと

ソクラテスは人間並みの正義に従って、脱獄をせずに死を選ぶことになった。しかし、人間並みの正義が、命よりも大切だということになるのか。ソクラテスは脱獄しなかったら死ぬのである。今までずっと、不正を為さぬように生きてきたのだから、一回ぐらい不正だと思われることを敢えてやってもよいではないかと思ってしまう。しかし、言行の一致をも含めた一貫性というものはもろいものである。たった一回そうするだけでそれらは崩れてしまう。それはソクラテスにとっての本当の生を捨ててしまうことでもある。ソクラテスは無知の知を神託によって導き出し、こう生きるべきだというやり方で生きてきた。「こう生きるべきだ」は、「こう生きるしかない」とも、「よく生きる」とも換言できる。それこそがソクラテスにとっての本当に生きることだとしたら、一回裏切ったあと、なおも本当に生きることができるだろうか。

そもそも、生が死によって終わるというのも本当のところ分からないのである。ソクラテスが『ソクラテスの弁明』で言っているように死はよいものなのかもしれないのだ²⁴⁾。それなのにたいして論理的な思考も経ずに価値判断をして悪いことだと決め付けてしまうのは、人間並みの

知を超えている。最期まで考え続けなければならないのだ。そして最後の飛躍をして死んでいだけなのである。そういった意味では人生におけるほかの全ての行動と何ら異なる事はない。

結 クレイトポンへの回答

クレイトポンの求める「その先」、それはソクラテスの生き方そのものにあられていたと言えよう。徳に意を用いて、「よく生きよう」と思う人間は、無知である人間なりにしかよくは生きられない。論理的に考えて対話をし、「正しいこととして同意した約束は守らなければならない」のである。あくまでも同意という形でしか人間並みの正義で以て従う対象はでてこない。しかし、その時点でのそれ、それ以上によいと思われるものがないロゴスに、その時点で、命をなげうってでも従うことが、徳に意を用いて、よく生きること、正しく、正義にかなって生きることなのであり、人間はそうすることしか、よくは生きられないということをソクラテスは身をもって示しているのである。正義についての確実な知は決して手に入らないが故に、それがたとえ賭けであったとしても。

注

- 1) 田中 (1976) による付け加え。
- 2) 「哲学をするべきだ」「徳に意を用いよ」という「勧め (προτροπικός)」。
- 3) cf. Sling (1999)
- 4) 後代につけられた『クリトン』の副題には、περί πρακτεῶνとある。Loebの対訳ではそれを、On Dutyと訳しているが、岩波版の全集では、「行動はいかにあるべきかということについて」と訳されており、こちらの方が正確である。

- 5) プロトレプティコス自体の構造分析、およびそれ自体の含む問題点については田中(1987)に詳しい。そこでは、『エウテュデモス』におけるプロトレプティコスのアポリアと絡めて、この『クレイトポン』が問題とされている。また、この『クレイトポン』はトラシユロス編のプラトン全集において、『国家』の直前に納められているのは、主要な問題点となって語られているのが「正義」についてであり、その問題点の焦点の当て方も『国家』に通じているところがあるからなのは明白である。すると、人は正義によって幸福を得ることを語ろうとしている『国家』こそ、クレイトポンの批判に対する反論としては適切なのだろう。しかし、クレイトポンの聞きかかった「その先」は、現代の読者がアポリアに終わる初期対話篇を読んだときに聞きたくなる「その先」に重なるものがあり、それは『クリトン』を読むことで明らかになるように思われるのである。
- 6) この「考察の出発点」を何ととるかに関してはいくつか論がある。従来の研究者はそれを、「不正を為してはならない」とここの「正しいこととして同意をしたことは欺いてはならない」の2つであると理解している。しかし、ソクラテスは出発点という意味でこの ἀρχήというタームを48E5と49E1で使っているわけであり、それが2つでは不自然に思われる。テキストの読解としては、篠崎(1985) p.84 ff. および p.95 fn.7,8の解釈に従いたい。
- 7) この部分の原文の解釈は従来のものと若干異なる。三嶋・田中(1998) p.166f. fn.22に従う。
- 8) cf.Cr.50A
- 9) いかに生きるべきか、その指針となるような命題はすでにそろっていて、今回は、例示や指針ではなしに、実際の、現実の問題としての、特殊な場合にどうするかを考えているのである。
- 10) cf.Ap.21D
- 11) cf.Ap.38A
- 12) cf.Cr.49D
- 13) この無知の問題については、様々な解釈がある。代表的なものを挙げれば、岩田(1995)、篠崎(1998)、Vlastos(1983)、Brickhouse & Smith(1989、1994)、Kraut(1984)などである。私の解釈は、無知の知から出発し、ソクラテスの言い切る倫理的問題に関する命題は全ては仮説でしかない、と帰結するものである。これは、岩田、篠崎の「確信」というタームを使った解釈に反対するものではない。ただ、「確信」は人間のする確信に過ぎないのだという意味で取って「仮説」と言いたいのである。本当の確信は人間にはできないと思われる。
- 14) ここのところが、後に『パイドン』で整理されて哲学の方法としてはっきりと

言われるようになる。cf.Ph.d.99C～100A

15) cf.Ap.21D

16) 知りえないからこそ、終わりなく欲求し続けられるという意味。

17) cf.Ap.38A

18) cf. 三嶋・田中 (1998) p.117f.

19) このように考えていけば、Barker (1977)、Young (1974) などによって取り沙汰された、『ソクラテスの弁明』と『クリトン』の間に矛盾があるのではないかという問題も、「そんな矛盾はない」ということで解決できる。

20) そもそも、その「アテナイ人たちは」、『クリトン』の前半部で出てくる、まるでお化けのように死刑を使ってソクラテスを脅す多数者なのである。その多数者の思いなしなど気にすることはしないのだとソクラテスは常に語っている。

21) cf.Cr.52A～53A

22) 古代は、法というものの起源により近いところにある。現代で法といえば一般には憲法などの成文法がイメージされてしまうだろう。しかし、古代でノモイと言ったとき、それは成文法だけではなく不文法や自然法をもまた、いや、より不文法的なもの、自然法的なものの方がイメージされていると思われる。

23) cf. 三嶋・田中 (1998) p.172f.

24) cf. Ap.40C4～41C7

* 引用部分のプラトン作品の略号は、Liddell&Scott *Greek-English Lexicon*, Oxford による。

テキスト及び参考文献

Barker, A., "Why did Socrates refuse to escape?", *Phronesis* 22 (1977) : 13-28.

Brickhouse, T. C. and Smith, N. D., *Socrates on Trial*, Oxford University Press, 1989.

Brickhouse, T. C. and Smith, N. D., *Plato's Socrates*, Oxford University Press, 1994.

Burnet, J., *Platonis Opera I*, Oxford Classical Texts, Oxford University Press, 1900.

Burnet, J., *Platonis Opera IV*, Combined edition of Republic and Clitopho, Oxford Classical Texts, Oxford University Press, 1978.

Burnet, J., *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates, and Crito*, Oxford at the Clarendon Press, 1924.

Duke, E. A. et al., *Platonis Opera I*, Oxford Classical Texts, Oxford University Press, 1995. (底本としたテキスト)

Fowler, H. N., *Plato I*, Loeb Classical Library, Harvard University Press, 1914.

岩田靖夫『ソクラテス』勁草書房, 1995.

Kraut, R., *Socrates and the State*, Princeton University Press, 1984.

三嶋輝夫・田中享英 訳 『プラトン ソクラテスの弁明・クリトン』 講談社学術
文庫 講談社 1998.

篠崎榮 『ことばの中での探求 プラトンを読む』 勁草書房, 1985.

篠崎榮 「ソクラテスは何をしたのか」 『ギリシア・中世哲学研究の現在』 有斐閣,
1998.

Sling, S.R., *Plato Clitopho*, Cambridge University Press, 1999.

田中美知太郎 訳 プラトン「クリトン」 『プラトン全集』 第1巻 岩波書店
1975.

田中美知太郎 訳 プラトン「クレイトボン」 『プラトン全集』 第11巻 岩波書店
1976.

田中美知太郎 「プロトレプティコス」 『田中美知太郎全集 増補版』 第5巻 筑摩
書房 1987.

Vlastos, G., "The Socratic Elenchus", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 1 (1983) :
27-58.

Young, G., "Socrates and Obedience", *Phronesis* 19 (1974) : 1-29.

Answer to Cleitophon — Justice of Socrates in “Crito”

KOJIMA, Kazuo

In “Cleitophon”, Cleitophon criticized Socrates that he exhorts to Virtue (‘protoreptikos’) but he never tells more, what must be done to live with Virtue. However, it can be read in “Crito”, in which Socrates considers about his actual behaviour. Socrates told Crito that he would follow logos that seems to be the best after logical consideration, and dialogued with him in “Crito”. Socrates persuaded Crito to consider whether escape from prison is right, and he refused to escape because “he ought to do what he has agreed to as a right thing”. It means human justice and it is what Cleitophon wanted to know. A man who wants to live a ‘well’ with Virtue could only live ‘well’ to a ignoramus somehow. He ought to dialogue

with logical thought and “ought to do what he has agreed to as a right thing”. Human justice goes only in form of an agreement strictly. Following the logos that seems to be the best at the moment, at any risk is living well, beautifully and rightly with Virtue, and a man has no other way to live a ‘well’ life. Therefore, Socrates chose not escape, but death.

(人文科学研究科哲学専攻 博士後期課程3年)